

平成24年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	日本・中国・韓国の児童の書字の実態と指導法についての比較研究
------	--------------------------------

研究代表者

氏名	所属	職名
加藤泰弘	美術・書道講座	教授

研究分担者

氏名	所属	職名

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度)

平成23年12月に国際学術シンポジウム「一東アジアにおける書教育が目指すべき方向」において、今日の児童・生徒の書字の現状と教員養成系大学における書字教育の動向と課題について議論を行った。その中で、近年の児童・生徒の筆記具の持ち方、書字力の低下、また教員養成系大学における学生の書字力、板書力等に課題があること等が指摘された。

平成20年3月改訂・告示の小学校学習指導要領において、「書写」は伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項に位置付けられ、書写の学習を日常生活や学習活動に生かすことが求められ、「書字力」はあらゆる学習の基礎であり、言語活動の充実を図る上でも重要であることが指摘されている。

本研究では、日本、中国、韓国の小学校児童の書字の実態と、三国教員養成大学における学生の書字の実態の比較研究を通して、東アジア・漢字文化圏における書字の共通課題を明確にし、今後の新たな指導法を検討することを目標とした。

情報化社会の進展に伴い、文字を手書きすることの減少が一般社会では指摘されているが、小学校において筆記具で手書きして漢字を習得し、文章を書くことには変わりはなく、学習活動における思考、判断、表現の場面でも筆記具で書くことを通して行われる。また、その能力が情報機器の活用場面においても生かされることが指摘されている。近年の児童の筆記具の持ち方や書字力に課題があることは、漢字文化圏である日・中・韓で指摘されているが、比較データもなく、その実態について分析的な研究が行われていない。また、その指導法や教具等については共通の見解が得られていない状況である。

これらを踏まえ、上記シンポジウムのパネリスト上海師範大学教授の張信氏、韓国国立京仁大学名誉教授の朴炳千氏の協力を得て研究を進めることとした。

児童の筆記具の持ち方、書字の現状について、本年度は、特にソウル師範大学校、京仁教育大学校及びその関連小学校において調査を行った。調査の概要と結果については以下の通りである。

- ・ソウル教育大学校初等教員養成課程学生の書字の実態調査(約100名)
- ・京仁教育大学校初等教育教員養成課程の学生の書字の実態(約120名)
- ・関連小学校(2, 4, 6学年)の書字の実態(約95名)

これらをビデオとデジタルカメラで撮影し、筆記具の持ち方の状況について分析を行った。また、韓国の教育課程、使用されている教科書、教材等の分析を行った。

教育現場にICTの活用が浸透している韓国では、日本以上に手書きの機会が減少し、教師が黒板に板書する授業が少なくなっている。また、教員養成課程においても、手書きすることの意義が希薄となっている実態が明確となった。

尚、中国については、9月以降の日中関係の影響もあり、具体的な調査はできず、意見交換と状況の聞き取り調査しかできなかったため、平成25年度において研究を継続する予定である。今後は、三国の比較を通して研究を進め、これらの成果を、大学の初等教育教員養成課程の「書写技能」や「書道科教育法I」等の授業に、現状や課題を提供していきたい。

## 研究成果発表方法

[発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。]

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。  
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

平成 25 年 8 月発行予定の『東アジア書教育論叢』2 号（逐次刊行物 東京学芸大学書道教育研究会）に、研究の概要を掲載予定である。